

L04a Martian cloud belt in autumn: 2001 observations

中串孝志(京大花山天文台)、赤羽徳英(京大飛驒天文台)、岩崎恭輔(京都学園大)、Stephen M. Larson(LPL, アリゾナ大)

今年は2年2ヶ月ごとに訪れる火星接近の年であり、我々は5月から7月にかけて、アリゾナ大学附属 Steward 天文台 Mt. Bigelow site の61インチ反射を用いて観測を行った。

中串らはこれまでに、1997年と1999年の観測から、赤道帯氷晶雲群の最盛期の姿を光学的厚さの変化という側面からとらえ、さらに、古くから知られており今なお未解決の「ブルークリアリング現象」に対する赤道帯氷晶雲群の寄与を明らかにした(e.g., Nakakushi et al, 2001, *J. Geophys. Res.*, 106, p.5043)。

今回の接近では北半球の晩夏～初秋が観測でき、これは南極冠の成長期並びに北半球夏季に特徴的な赤道帯氷晶雲群の衰退期にあたる。従って今回の観測データの解析結果と合わせ、南北極冠と並んで火星気候を司る存在とされる赤道帯氷晶雲群の活動の全貌を明らかできるものと期待される。

本講演ではこのような観点から、今回の観測で得られたデータから今年の火星気候状態を概観し、特に赤道帯氷晶雲群については、その光学的厚さの予備的な解析の結果を報告するものである。